
じんけん ぶんか まちづくり

一般財団法人とよなが人権文化まちづくり協会

第64号（2019年7月）



じんけん ぶんか まちづくり第64号

就任のご挨拶「理事長就任にあたりまして」	3
退任のご挨拶「今一度、原点に立ち返り、見つめ直す」	9
元号フィーバーの最中「ウロコ探しの日々と解放教育」	10
資料室から東北へ「仙台スタディ・ツアーに参加して」	14
スタディ・ツアー座談会「東日本大震災被災地に行く」	18
応援したら負けですが「『必死のグッチ』に声援を！」	23
有難迷惑の10連休に「『無言館』訪問記」	24
2019 特別講座「映画『天皇と軍隊』を終えて」	27
よろしく願います「多様な価値観をみつめる」	29
解放ジュニアの今「結婚差別とカミングアウト」	31
研修を通して「改めて自分を問う」	32
お知らせ	33
役員体制	34
編集後記	35

表紙の写真「無言館」

一度は訪ねたいと思っていた「無言館」に「連休」を利用して行ってきた。第二次世界大戦中、志半ばで戦場に散った画学生たちの残した絵画・作品・絵の道具・手紙などが展示されている。館主の窪島誠一郎さんは「無言館」のリーフレットにこう書いている。

一戦争中、数多くの若い生命が戦地に駆り出され、戦場のツユと消えました。そうした中には、画家になることを一心に夢み、生きて帰って絵を描きたいと叫びながら死んでいった一群の画学生たちがおりました。絵筆を銃に替えて生きねばならなかったかれらの無念と同時に、人間にとって絵を描くということがどれだけ至純な歓びにみちた行為であるかを物語る、ひたむきな生の軌



跡があったと思います。

この戦没画学生慰霊美術館「無言館」は、そうした画学生たちがのこした作品と、生前のかれらの青春の息吹きをつたえる数々の遺品を末永く保存、展示し、今を生きる私たちの精神の糧にしてゆきたいという希いをもとに、1997（平成9）年5月1日「信濃デッサン館」の分館として開設されたものです。どうか、このささやかなる施設において、少しでも多くのかたがたの眼に、かれらの初々しい熱情にあふれた作品がふれることをねがってやみません—

4月末の信州は関西より季節が遅く、満開の桜を観ることができ、得した気分になった。（24ページの「訪問記」に続く）

【事務局長：佐佐木寛治】

就任のご挨拶

理事長就任にあたりまして

大源 文造（理事長）



皆さん、こんにちわ。

この度、一般財団法人とよなか人権文化まちづくり協会の理事長に就任いたしました大源と申します。自己紹介を兼ねて就任のご挨拶をさせていただきます。

本年5月17日に開催されました2019年度定時評議員会におきまして、役員改選が行われ、そこで、新たに役員として選任いただくとともに、理事長に就任することとなりました。

また、副理事長には、これまでから当協会の役員として貢献されてきた玉置さんが就任されました。新しい役員体制ということで、なにかと行き届かない面もあろうかと思いますが、これ

まで同様よろしくお願いいたします。

ところで、私が当協会の役員に参画することとなった経緯ではありますが、前理事長の中川さんから、「是非、協会の役員に参画して、人権文化まちづくりのためにともに頑張ろうではないか」とお声をかけていただいたのが、事の始まりでありました。

中川さんと私の縁については後程述べるとして、簡単に自己紹介に入りたいと思います。

私は、1974年4月に豊中市役所に就職して以降、会計部門を振り出しに、福祉、人権、環境、市民生活、教育委員会と様々な分野で行政経験を重ね、2012年12月に教育長に就任しました。そして、昨年3月末、任期満了により退任しました。通算しますと丁度44年間となりますが、社会人としての一歩を豊中市役所でスタートし、豊中一筋に一つのゴールに到達することができました。現在は、自宅のある猪名川町で、連れ合いが営む小さなパン工房をサポートしながら、より美味しいパンづくりやお店の経営のあり方など、

これまで経験したことのない未知の世界に頭を悩ませながらも、連れ合いと一緒に日々奮闘しているところです。

さて、こんな私が、協会の役員をお引き受けすることとなりましたのは、先ほども申しあげているように、前理事長の中川さんからの要請が事の始まりではありますが、その背景には私と中川さんとの縁、私と協会との縁があったからだと思います。

中川さんは、互いに豊中市職員であった時代に、随分お世話になりご指導も頂いた先輩であります。特に広報課長をされていた時、私は同和对策室に勤務しており、市に寄せられた差別文書をめぐり、二人でその対応に苦慮しながらもあたったこと、今も記憶しております。

また、広報とよなかの啓発コーナーである「ひゅうまん通信」では、部落問題について、その現実をしっかりと知ってもらうために、記事掲載に取り組んでいました。具体的なテーマ設定から、取材活動等を通じて、誌面づくりに入るわけですが、文書構成、文章表現にいたるまで、大変難しい作業でした。そんな時、中川さんにはいつも相談にのっていただきました。そして、記事の締め切り近く、広報課長としては、ほかの記事も含め全体編集しなければならぬ大変忙しい時期にもかかわらず、私が広報課の部屋に原稿を持っていくと、「よお、大ちゃん出来たか、持っておいで、見てあげるよ」



といつも笑顔で見えていただきました。当時、中川さんからは、出来上がった記事を見つめ、「こうした地道な啓発活動を通じて、一人でも多くの方が部落問題について関心を持ち、そして、ともに学んでいって欲しいよな」と言われました。いつものことですが、記事が出来上がるまでは、何度も挫折しそうになるのですが、最後にこの言葉を聞くと、いっぺんに疲れが取れ、元気をいただいたこと、今も忘れません。

随分時間が経過しましたが、今回の要請を受けたとき、その時間は短縮され、当時の気持ちが蘇りました。改めて深い縁で繋がっているなと感じたところでもあります。

そして、協会との縁ですが、詳細は誌面の都合もありますので、別の機会にしたいと思います。先述のとおり、私の役所生活の内、1988年から2003年までの15年間、同和行政に携わっておりました。丁度、特別措置法時代といわれる33年間の内、後半期の15

みんなの知恵と力をあつめて、部落解放の「ひと・まち・くらし・なかま」づくりをすすめよう!

解放

第1294号 2005年6月4日
編集発行：部落解放同盟中央本部運営委員会

れんさい・部落差別をみつめる・その17

とくべつ そちほうじだい こうはんまみ お 特別措置法時代の後半期に身を置いて

寺本美穂さんからパトンを受けて、あっという間に2ヶ月余りが経ってしまいました。その間に、乾さんの原稿があれよあれよと、「解放」第1288号に掲載されてしまったではありませんか。本当は、私が乾さんのピンチヒッターだったはずがー。

二つ返事でお引き受けしたのですが、3月は例年通り、新年度に向けた準備や人事異動などもあって、めまぐるしい状況が続きました。そうしている内に、新年度を迎えたのですが、母の入院、手術と、公私共に落ち着く間もなく、ゴールデンウィークといった次第で、ようやく書き始めたのが5月になってしまいました。

「解放」のこのコーナーについては、以前から知っていました。一通りは読んでいました。ただ、私に原稿が回るとは、正直思っていませんでした。確か、第3回「人権サロン」に対する重本洋輔さんの感想文からスタートして、さまざまなが「部落差別をみつめる」をテーマに思いや考え、さらには、ご自身の振り返りなどが掲げられる中で、少しでも部落階級の解決に向けて、なにかを伝えあい、気づきあえるような、そんな人から人へのパトントッチとして連載されており、佐々木さんのコメントも含めて、これまで興味深く拝見してきました。

さて、部落差別をどのようにみつめてきたのか、ということについてですが、私自身の簡単な自己紹介とあわせて、これまでの振り返りをする中で、少し整理してみたいと思います。
【大源文造】



の中。これからどうなるのか、なにをするのか、説明を受ける間もなく、現地へということでした。

大阪空港に着き、差別落書きが書かれていた男子トイレに。すでに豊中、蛍池の両支部をはじめ、同和教育室からも職員が来ていました。落書きの内容は、個人を特定するような内容ではありませんが、明らかに部落差別を扇動するような内容でした。私たちは写真撮影を行うとともに、落書きの大きさや形状なども記録した上で、最後に消去するということでした。私の役割はそれらを記録した上で、持参していっ

からず、ただただ上司や先輩職員の様子を見ていた時に、一本の電話がありました。「大阪国際空港で差別落書き発生…」その第一声を受け、職場のムードは一変し、ただならぬ緊張感が走りました。初日の私にも、それは十分すぎるぐらい伝わりました。そうこうしている内に、カメラの用意、トレース紙、スケール、消去セットの用意など、差別落書きへの対応のための準備がすすめられます。

「大源君、一緒に出動や」、なにがなんだかわからない内に、用意された機材を運び、気がつけば空港をめざす車

たシンナーを使って拭き消すことでした。

ここまでの作業が終わった段階で、集まった関係者によって、発生から消去までの経過の確認、差別事象の発生状況などの情報交換、さらには再発防止に向けての意見交換などが行われたあと、解散となったのでした。

私にとって、その日は本当に長く感じた一日でした。そして出勤初日の感想としては、正直なところ落書き一つに大変だなと思っていました。もちろん、それまでにも研修などを通じて、



差別落書きがあとを絶たないことは知っていたのですが、実際に見たことはなかったし、こんな風に処理をすることも知らなかったの、とにかく一つひとつが驚きといった感じで、その時は、こうした落書を本当に見過ごすことができないとの思いにまでは、至りませんでした。

私は落書きが発生する度に出動を重ね、半年ほど経過した頃には、差別落書きの対応も随分慣れ、手際良く出来るようになってきました。そんなある日、朝出勤すると、電話により阪急新伊丹駅で差別落書き発生との連絡がありました。

直ちに準備を行い、現地に向かいました。現地では、すでに伊丹支部の方も来られており、豊中市と伊丹市の関係者により、差別落書きの確認から写真撮影など一連の作業を行うところでした。私は先程も言いましたが、それまでに数々対応してきましたから、要領良く作業をすすめて、おそらく誰が見ても、問題のない処理の仕方だったと思います。

さて、いつものように消去までの作

業を終え、関係者により経過の確認を行いました。その時のことは今もしっかりと覚えていますし、その時を境に部落差別に対する考え方や気持ちは大きく変化しました。

それは、伊丹支部の役員をされている女性が話されたことなのですが、「豊中市の職員さんは本当に手際良く、差別落書きの処理をされました。それはそれで感心しました。しかしね、私はあの差別落書きを見て、胸を搔きむしられる思いで一杯でした。」「どのように感じておられましたか…」その問いかけに、答えることが出来ませんでした。

しばらくすると、彼女は静かに、しかし厳しく「責めているのではないですよ…。確かにただの落書きです、落書きは消してしまえばそれで終わりかもしれません。しかし、部落差別によってこれまでどれほど多くの人が苦しみ、時には自らの命までも…。差別によって受けた心の傷は、落書きのように消えないのです。そんなことは、あなたも十分わかっているとは思っていますが、単に落書きの処理ということだけでなく、問題の本質について考えて欲しいのです」

差別落書きの処理は出来るかもしれないが、部落問題とは、そして差別というものが、どういうものなのか…。なにも知らない私を見透かしたような、彼女の言葉でした。その時は、すごく緊張していたし、返す言葉もなく、ただ首をうなだれるだけだったように

思います。ただ、このことによって、私自身が“部落問題”とは“部落差別”とは何か、一生をかけて考える大きな命題に、初めてぶつかったのではないかと思います。

“月日の経つのは早いもの”とよく言われますが、振り返ってみると、本当にあっという間の15年間でした。同和対策課で勤務した15年間は、特別措置法時代といわれた33年間の丁度後半期（正確にいうと特別措置法時代の後半14年と法が失効してからの1年で合計15年です）でもあります。同和対策事業が進められ、地区の状況もかつてのような厳しい状況は改善されていく中で、事業を整理・縮小していった時代なんです。また一方では、心理的差別の解消に向けて、それまでのハード中心から啓発や教育などのソフトへと転換の時代ともいわれました。

法にもとづいて各種の事業を実施し、目に見えて成果はあがっていったし、実際、私もかつての状況は写真でしか知りませんでしたから、表面上だけを見ますと、問題は解決したかのよ



うに思われました。そんなことから、「部落問題は、もう解決したのになにをしているの?」といった質問を投げかけられたことも、しばしばありました。

私はこうした時代の中で、一方では、先ほどの差別落書だけではなく、結婚差別、身元調査、差別電話など数え切れないぐらいの差別事象に直面してきました。今でも、一つひとつの差別事象について、目を閉じるとその時の情景や、かかわった人の様子をはっきり思い浮かべることができます。私は同和対策課の職員として15年間、そうした事実にかかわってきましたが、ある意味で生き証人だと思っています。

部落問題を解決しようとする多くの人びとの努力にもかかわらず、何故、部落差別がなくなるのか、伊丹支部の女性が言われた問題の本質とは一体何なのか、今もって明解な答えは持ち合わせていません。

ただ、私はこの15年の間に、実に多くの人びとと出会いました。差別や人権の問題をともに考え、差別のない社会をつくるために、それぞれがさまざまな課題や悩みを抱えながらも、一人ひとりがまず身近なことから…。お一人お一人から、勇気や元気を一杯いただきました。ある方が、こんな出会いを“志の縁”としてその絆の輪を広げることが、差別のない社会への近道ではないかと言われました。今、その言葉をあらためて噛みしめています。

退任のご挨拶

今一度、原点に立ち返り、 見つめ直す

中川 幾郎（理事）



このほど、当協会の理事長（代表理事）を退任し、次の理事長を前豊中市教育長の大源文造さんに引き受けていただくことになりました。また、副理事長を務めてくださった桑高喜秋さんも同時に副理事長を退任し、その後任を理事の玉置好徳さんに引き受けていただくことになりました。（なお、私も桑高さんも引き続き理事を務めます。）

まず、これまで私たちを支えてくださった財団の評議員さんをはじめ、理事会の皆様、協賛、支援をしてくださってきた支援者の皆様に、理事長、副理事長を退任する者を代表して心から御礼を申し上げます。また、懇切かつ誠実に理事会を支えてくださった事務局の皆様にも、厚く感謝の意を表します。

振り返ってみますと、旧法時代に同和事業促進協議会が果たしてきた各種の成果を発展的に継承することから出発したこの協会ですが、それだけではなく、部落問題に取り組んできたすべての人びとが切り開いてきた、普遍的な人権への視座を、各種の人権課題（障がい者、女性、子ども、在住外国人、LGBT、ハンセン病、など）とつないで、広げていくことがこの協会の究極のミッションであると、当初から心得てきました。

しかしながら、そのミッションを大きく達成してきた、とはとうてい言い得ない現状であることも謙虚に認めざるを得ません。部落問題一つとっても、「部落差別解消法」が制定されながらも、インターネットにおける差別事象の連続的な発生がみられます。また、国際的な女性の地位に関しても、日本国は2018年は149カ国中110位にとどまる有様で、先進国クラブと渾名されるOECD加盟国中最下位です。

このような後退をしていく社会状況の中で、実社会においては、まだまだ建前としての人権尊重と、ホンネとし



での差別が混在し続けてきていると思われま
す。それ故に、個々の人権領域での取り組み

が、再び問い直されてきている、と痛感いたします。今一度、原点に立ち返り、生活者である市民社会の実態を見つめ直し、公共政策のあり方を問い直すべきでもあるでしょう。

そのような転換期の環境の中で、後任の理事長、副理事長に協会の舵取りをお願いすることは、いささか心苦しい次第でもありますが、新しい世代のお二人がもっておられる、新鮮で幅広い視野と見識、行動力に、協会の今後をお委ねしたい、と心からお願いを申し上げます。

末尾となりましたが、皆様、どうかこれからも「とよなか人権文化まちづくり協会」へのご支援を、お願い申し上げます。ありがとうございました。

元号フィーバーの最中

ウロコ探しの日々と解放教育

浅野 真吾（評議員）

6月5日だったか6日だったかに、事務局の森山さんより電話をいただき、新しい評議員として、何か文章を書いてほしいと依頼されました。

その電話の前、私の抱える個人的な悩みを、酒井さんや森山さんに、まちづくりセンターで聞いていただいた時、「浅野さん、今度、自己紹介でもなんでもいいから、文章を書いてほしいねん」と森山さんに頼まれ、「いいよ」と引き受けていました。それで、電話を受けたとき、「ああ、本当に書くんや」と思い、締め切りを聞くと15日の土曜日までということで、「書

けるやろか？」と思ったのですが、一度口頭で引き受けたことですし、「わかった。なんでもいいんやね」と念を押して、引き受けました。それで、その「なんでもいいんやね」と念を押したことを、とりとめもなく書き進めようと思います。

最初にお断りするの、これから書くことの全ては、何か数字的に実証したとか、そういうことではなく、あくまで私の個人的な感想です。そのつもりで読んでいただけるとありがたいです。

私は、豊中五中で、長く人権教育の

担当者として勤めてきました。人権教育の担当といっても、私が、子どもたちへの人権教育を全て担っているわけではなく、人権教育そのものは、それぞれの学年で担当者がいて、学年で計画し、それぞれの教員が、子どもたちと一緒に取り組み、共に考えを深めていくわけです。

こう言ってしまえば簡単そうに聞こえるかもしれませんが、先生方の中には、その必要性を懐疑的にみられる方もいらっしゃるわけで、そうでなくても、学校の文化としては、教科授業や学校行事が第一で、人権教育はその次として考えられがちです。その大切さを、学校のありようとして、こだわっていないと、たちまち、次へ次へと順送りされ、気が付くと、人権教育はおざなりになる。というようなことが起こるわけです。

懐疑的だったり、次へ次へと順送りするのは、校長や教頭といった管理職の中にも、お見受けすることがあります。管理職ですから、人権教育の大切さはわかっている、その推進を様々なところで「発信」されるのですが、多くの管理職がそうとは言いませんが、教育実践となると、前述したような「考え」を基準にされる方もいらっしゃるように思います。

それで、人権教育担当者としては、粘り強く、時には、したたかに、アイデアを出し続けて、「ああ、そういうことならできるかもね」の意見を増やしながら、その推進に腐心することになるのですが、私の場合は、幸いなこ

とに、現役時代には、管理職も含めて、人権教育推進の理解者も多く、そう苦労することなく、退職の日を迎えられたように思っています。



話は変わりますが、私は今、娘と孫娘の3大家族なのですが、その娘が、5月1日に新聞を見ながら（本当は1日じゃなかった気もするのですが、話の都合上、5月1日とさせていただきます）私に言うでもなくこう言いました。

「令和か・・・なかなかいいやん」

「なあ、お父さん？」とは言いませんでしたので、独り言ぐらいのことだったのでしょうが、私は「う～ん、ま、どうなんだかな～」と、口の中で、もごもごとつぶやいていました。

現役時代、今もそうですが、私は西暦表記にこだわっていて、元号や、それにつながる天皇制に「？」の立場です。ので、「ほんまやね。令和っていいよね」などと娘の言葉に肯定的賛同は寄せませんでした。とあって、「そもそも元号っていうのは・・・」などと、娘に自分の考えを示すこともしませんでした。

私に似て、考えを否定されると、極端に機嫌の悪くなる娘は、「はい、ま

たお父さんの変なウンチクがはじまった・・」などと受け流してくれたらしいのですが、場合によっては、どこにあるかわからない、娘の「ウロコ」に触れてしまい、思いがけずの修羅場になることもあって、家族のなかに争いを持ち込みたくはない私は、娘の言動に、気を使って生きる毎日を送っているのです。

竜のあごの下にあるという「逆鱗」は、一枚だけと、浅学の私は認識しているのですが、娘の「逆鱗」はどこにあるかもわからず。その上、どうも一枚だけではなさそうで、その場所を早く見つけて、うまく娘と付き合いたいと思う今日この頃です。

さて、そんな訳で、少しフラストレーションのたまった私は、その晩、なじみの居酒屋に、飲みに出たのですが、カウンターに座るなり、おかみの一言。

「浅野さん、令和なんて予想できた・・・？」

「いや・・・」

「あのね、お客さんの中に、言い当てた人いてるんよ」

「ふ～ん」

話にのってこない、私に向けて、おかみ。

「令和って、なかなかいいやんね～」と、娘と同じセリフ。

「ま、昭和だろうが平成だろうが、令和だろうが、1954年生まれのオレには関係ないけどな～。それより、ビールくれる」

「はいよ！瓶ビールやったね」

ということ
で、2019
年5月1日
(?)の夜
は、娘や世
間との、大
きな摩擦も
なく暮れていったのです。これでいい
のかな～・・・？



話は再び変わるのですが、森山さんに依頼の電話をもらった日の、前だったか、後だったか、はっきり覚えていないのですが、車を運転しながら、ラジオを聞いていますと、ラジオの中の女の人がこんなことを言っていました。

「最近の若い人は、声が、みんな同じように聞こえるんですよ」

その女性は、はっきりとは覚えていないのですが、演劇の脚本を書かれているか、演出をしているかの人で、舞台に立つ若い人たちのことを、そう言っていました。

いわく、「この間も、高校の演劇部の全国大会を見に行ったとき思ったのですが、みんなセリフの言い回しが均一で、だれのセリフも同じように聞こえるんです」続けて、「あれは、指導する側の問題もあるでしょうが、若い演者が、他の人と同じようなトーン、音量でいうことで、安心してらるんでしょうね」

一言一句、正確に、彼女の言ったことを再現してはいませんが、だいたい、こういうことをしゃべられていて、そ

の均一性を憂いている。と私は聞きました。いや実際に、「こういう、みんなが右へならへという感じは、演劇界だけじゃなく、若い人の文化として心配ですよ！」というような意味のことも、おっしゃっていたように思います。このことについて、長々とは書きませんが、私も、ここ一月ほどの、新元号や新天皇への、国民を挙げてのフィーバーぶりの「演出」と、その演出に、笑顔で立ち振る舞う人たちの「均一性」を見ていると、「どこを切っても金太郎」を、上手に作られているようで「なんか、嫌な感じ」という気はします。翻って、考えを進めてしまうと（あんまりそんな風に考えたくはないのですが）「学校」というところも、均一性を子どもたちに求めてきたのかも・・・？と考えるしまうのです。オダイモクとして、「子どもたちの個性を大切に・・・」といっても、思いっきり集団から飛び出した「個性」は、どうだかな～。という感じできたのでは・・・？

そろそろ、まとめたいです。

つまり言いたいことはこうです。私たちの社会も、学校も、本当の所では、そこに集う個々が、同じ方向を向き、同じように考えている方が、「あつかいやすい」と考えてきたのではないか。そして、それは集団を構成するメンバーの一人一人も、どこかでそう考え、自分が集団の中で異質である事を避けてきたのではないか・・・？

他と同じように考え行動するこ

と・・・均一であることでの「安心感」。それを求める心の動きが、「どこを切っても金太郎」を、「なんか嫌な感じ」と思う心に歯止めをかけてきたのではないか。世間と違う意見を持ち、「NO！」という人を排除するような動きすら感じる、このごろ。

「その背景を知り、子ども一人一人を見つめること」

「いつであっても、しんどい子の味方であろうとすること」

「子どもそれぞれが、それぞれで、命を輝かすことが大切と心に刻むこと」

若い教員が増えていくなかで、均一な、あつかいやすい子どもを育てるのが教育ではないと確認し、先達から受け継いだ解放教育。一人一人の子どもを大切にする。その教育のありようを再度確認する必要があるように感じています。

そんな学校のありようは、そのまま世の中のありようであってほしいと思うのです。

自分と違うものを、異質、異物として排除しようとする社会が、その勢いを増していくなら、「差別」は、「しめしめ」と、ほくそ笑むのではないのでしょうか。

2018年度、第44回部落解放文学賞・児童文学部門に浅野さんの作品が2編入選されました。部落解放760号に掲載されていますので、是非ご一読を。資料室に蔵書あります。

資料室から東北へ 仙台スタディツアーに参加して

寺本 美鶴（評議員）

はじめに

昨年7月からまちづくり協会で始まったブックトークが楽しくて、二か月に一度なのが待ちきれない思いでした。

そんなブックトークでお知り合いになった方が栗山はるみさんです。

協会主催の講座やフィールドワークバスツアーで一緒になった事はあるものの、特に話したことはなかったのですが、ブックトークでの出会いが今回の仙台行きにつながりました。

栗山夫妻は3.11が起きるまでは仙台に住まわれていたのですが、震災後は夫の実家のある豊中と仙台をいたり来たりしながら、いずれ豊中を終の棲家にとっておられたようですが、今年になり豊中の家を購入したいという人が現れ、4月に仙台に戻ることになったのです。

急な話だったので、協会のブックトークで会うことはできなかったのですが、3月のドラム読書会に来て、「是非仙台に来てください。被災地を案内しますので」と言ってくださり、その場で仙台行きが決まりました。

その後、ブックトークとドラム読書

会のメンバー5名と映像作家さん1名が加わり、日程が5月12日～14日の2泊3日に決まりました。仙台に帰った栗山さんに連絡すると、1週間ほどしてスケジュールが送られてきました。それがこれです。

5月12日（日）仙台空港着	
ジャンボタクシーで仙台空港から南三陸町に向かいます。	
11：00	高速道を松島北でおり、JR石巻仙石線手樽駅へ
11：50	古民家カフェでパスタランチ
13：00	野蒜駅跡、石巻門脇地区を見て、日和大橋を通り牡鹿半島の蛤浜へ
14：30	ふたたび石巻市街地を通り、旧大川小跡に
15：30	小学校跡、長面浦の見学
16：30	南三陸町に向かう
17：00	南三陸ホテル観洋泊
5月13日（月）【仙台に戻ります】	
8：45	南三陸町 語り部バスツアー
10：00	バスで仙台に
12：00	仙台のホテルに荷物を預け、仙台駅前で牛タンランチ
【仙台の町と情報の中心を見る】	
13：00	アーケード街を散策、定禅寺

通りへ

14:00 仙台メディアテークの見学

【庶民の味覚探訪】

15:30 市バスと地下鉄で地域に密着したお店へ

森民酒造・かま志ん蒲鉾店・駄菓子
の石橋屋

19:00 ビストロアンコールで夕食

5月14日(火)

仙台市の観光バスるーぷるで市内観光

8:45 仙台駅⇒瑞鳳殿⇒仙台城跡⇒
宮城県立美術館⇒仙台駅

【仙台駅周辺で食事と買い物】

12:00 鮭ランチの後、駅ビルをみる
仙台の南の海岸沿いに空港へ

14:30 仙台のホテルから、語り部タ
クシーで出発

16:30 仙台空港着

このスケジュールと予算がきっちり出されたものが送られてきて、私たちは本当に安心して仙台に旅立ったのでした。

1日目

空港から海沿いに車で走りながら、野蒜駅跡や女川町の復興を見、工事中の海岸線を見て当時に思いをはせました。忘れられないのは大川小学校跡でした。目の前に山があるのに何故そこに逃げなかったのか、語り部タクシーの運転手さんも怒りを抑えることができない風でした。108名中74人の児童、教師10名が亡くなっています。

地震発生から51分、警報が出てからでも45分、時間はありました。「津波てんでんこ」何度も聞いた言葉です。津波が来たら、てんでに高台ににげろというこの言葉、大川小学校ではどうして生かされなかったのでしょうか。私たちでも簡単に登れるゆるやかな山です。おまけに運動場の延長にあり学校の一部でもあるようなたたづまいです。子どもたちにとってはシタケ栽培をしたり、日常的に遊んだ場所でもあったでしょう。

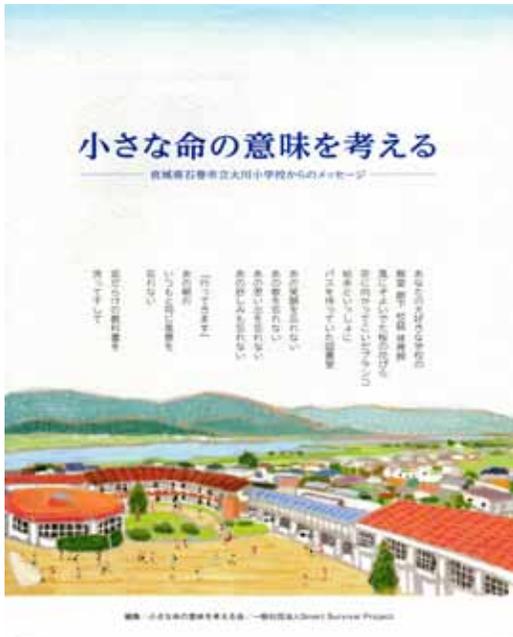
市や教育委員会がきちんと向き合わず責任逃れをしようとするのが、余計に怒りと悲しみを深くしています。

2日目

ホテル観洋の語り部バスに乗りました。語り部バスは震災の翌年2月から毎日走っています。私たちがテレビでよく見た防災対策庁舎や高野会館、津波に飲み込まれた町を案内してくれました。工事車両だらけです。私たちの語り部さんは伊藤さんという40代の男性でした。何年も毎日語り続けておられ、上手すぎると思いながらも胸が



大川小学校



大川小学校で起きたことについての検証、伝承、そして想いを多くの人と共有する目的で作られた任意団体（画像は団体のパンフレット表紙）

熱くなり、涙があふれる話でした。彼は何度も、この地震であったことをなかつたことにしたくないと語っていました。

私たちの旅行の少し前に新宿で高齢者の運転する車で自転車に乗った母子がなくなるという事故がありました。伊藤さんはその事故現場にも行ったそうで、その場に行かないとわからない事があると言って、震災を体験した彼が、人の気持ちに寄り添っていこうとするその気持ちに頭が下がりました。

3 日目

仙台空港まで、また語り部タクシーを利用して語り部さんの話を聞きながら走る。震災遺構となった荒浜小学校は海のそばにあります。4階建て

の鉄筋だったので子どもたちは屋上に避難し助かりました。子どもたちが助かったと聞くとホッとしました。

まわりは一面工事中です。語り部さんによると周辺には救命センターやヘリポート、植物園などができそうです。

被災地を回って思うのは、このような復興を住んでいた人達は願っているのだろうか？ここにまた人が来るのだろうか？このような場には人は戻ってきたいと思うのだろうか？

いっぱい疑問を感じながら話を聞いていました。

宮城も福島、岩手も豊中に住む私にとっては遠いところ。一度は行かなければと思っても3.11は遠くなっていました。

今回、栗山夫妻の尽力で短い日程ではありましたが、南三陸、石巻、仙台とまわることができました。

ただ震災の跡をめぐるというだけで



語り部バスから見た高野会館

〈座談会〉

協会事業から生まれたスタディ・ツアー

東日本大震災被災地に行く

協会主催のブックトークやフィールドワーク、まちづくり講座に参加した方たち6人が仙台市、石巻市、南三陸町という東日本大震災の被災地へ自主的なスタディ・ツアーを実施されました。現地にお住まいでない方ではとても組み立てられないような充実したスケジュールを栗山夫妻が組んでくださいました。

6月17日は座談会ということで、参加された方のうち都合のついた4人にお集まりいただいて、ツアーの写真を見ながら自由に感想を語っていただきました。

○出席者 荒木隆文（市民、協会事業参加者）、岩城真紀子（市民、協会事業参加者）、寺本美鶴（協会評議員）、西村寿子（協会理事）、森山輝子（協会事務局）

〈参加のきっかけ〉

岩城：今まで東日本大震災の被災地に一度も行ったことがないというのはとても恥ずかしい思いでした。ちょうど5月末からチェルノブイリ事故があったウクライナに行くのに、福島には行ったことがない。一人ででも行きたいという思いでした。この3月末に仙台に戻られた栗山さんご夫妻とは不思議な縁を感じていました。というのは、



栗山さんの夫さんには5日続けて会ったことがあります。すてっぷでも図書館でもじんまちセンターでも連続して会いました。栗山さんのお名前はブックトークで一緒したことがあるので存じていましたが、お話してみたいと思っていました。また、お会いできるわと思ったら今度の旅行で会えました。お二人とも私が生きている世界とすごく近いところにおられて惹かれるはずだと思いました。協会が取り持ってくれた縁がとても不思議でありがたかったです。

寺本：一番嬉しかったのはセンターで出会った人と行けたということです。震災のことは、ずっと気になっていたし、原発事故もひどいことだと思っていました。一度は被災地に行ってみ

たいと思っていましたが、今回栗山さんに出会っていくことができました。ブックトークで紹介してくれる本も、とても思いがこもっていました。栗山さんの人間としての魅力に惹かれて、この方のお話をもっと聞きたいと思いました。栗山さんの方から仙台に来てくださいというお声かけがあって、この旅を良きものにしてくれるという予感がありました。

荒木：栗山さんからはブックトークのときに、「赤松小三郎」の本の話を聞いて、明治維新はテロでたまたま天皇の御旗があったから権力を握ったということがわかりました。

西村：私は2011年11月に石巻市と福島市を訪問しましたが、そこから行く機会がなく、今度のお話でぜひ一緒したいと思いました。

<旅の印象>

森山：行ってみてどうでしたか？

岩城：1日目の大川小学校はさぞモダンな学校だろうなという学校でした。ここで、74人の子どもたちが津波にのまれてなくなるのです。

西村：タクシーの運転手さんに言われて大川小学校の裏庭に登りましたが、5分もかからずに登れて、本当にどうしてここに避難しなかったのかと思いました。



荒木：今回行って、報道されていることが全てではないということがよくわかりました。テレビくらいしか見ていませんが、現地に足を運ぶことで報道が編集されていることがとてもよくわかり、刺激的な旅でした。

岩城：あちこちで防潮堤を作っていますが、住民が住んでもいないのに、なんのために防潮堤をつくるのか、お金を使うだけやと怒っておられましたね。

荒木：アメリカとメキシコの国境みたいで。海が見えなくなるというのは、どうかと思います。

寺本：仙台市の荒浜でも防潮堤なんているのかなあと思いました。

森山 高い壁を作ってもそこを超えて波が来たら、今度は引いては行かないですね。

岩城:1日目に宿泊した南三陸町の「ホテル観洋」で出会った宿泊の方は秋田にお住まいで震災当時、仕事の都合



たいと思っていましたが、今回栗山さんに会っていくことができました。ブックトークで紹介してくれる本も、とても思いがこもっていました。栗山さんの人間としての魅力に惹かれて、この方のお話をもっと聞きたいと思いました。栗山さんの方から仙台に来てくださいというお声かけがあって、この旅を良きものにしてくれるという予感がありました。

荒木：栗山さんからはブックトークのときに、「赤松小三郎」の本の話を聞いて、明治維新はテロでたまたま天皇の御旗があったから権力を握ったということがわかりました。

西村：私は2011年11月に石巻市と福島市を訪問しましたが、そこから行く機会がなく、今度のお話でぜひご一緒したいと思いました。

<旅の印象>

森山：行ってみてどうでしたか？

岩城：1日目の大川小学校はさぞモダンな学校だろうなという学校でした。ここで、74人の子どもたちが津波にのまれてなくなるのです。

西村：タクシーの運転手さんに言われて大川小学校の裏庭に登りましたが、5分かからずに登れて、本当にどうしてここに避難しなかったのかと思いました。

荒木：今回行って、報道されていることが全てではないということがよくわかりました。テレビくらいしか見ていませんが、現地に足を運ぶことで報道が編集されていることがとてもよくわかり、刺激的な旅でした。

岩城：あちこちで防潮堤を作っていますが、住民が住んでもいないのに、なんのために防潮堤をつくるのか、お金を使うだけやと怒っておられましたね。

荒木：アメリカとメキシコの国境みたいで。海が見えなくなるというのは、どうかと思います。

寺本：仙台市の荒浜でも防潮堤なんているのかなあとと思いました。

森山 高い壁を作ってもそこを超えて

波が来たら、今度は引いては行かないですね。

岩城：1日目に宿泊した南三陸町の「ホテル観洋」で出会った宿泊の方は秋田にお住まいで震災当時、仕事の都合でこちらに来られた折の「臭いが忘れられない」とおっしゃるのです。お風呂に気持ち良く入っている時に、見ず知らずの私に涙ながらにお話になるので、きっと言わずにはおられなかったのでしょうか。臭いというのは忘れられないのだと思いました。

西村：ホテル観洋の語り部バスの方もおっしゃってましたが、「生き延びても臭いで死にたくなる」とおっしゃってましたね。

岩城：ホテルからの日の出が感動的でした。震災の翌日もとても日の出は素晴らしかったとお聞きしました。

寺本：本当に綺麗でしたね。

岩城：実際の日の出とカメラを通して



みる日の出がこんなに違うのかと思いました。

寺本：ホテルの語り部バスもとても感動的で帰る時に「ありがとう！」と感謝の気持ちでいっぱいになりました。社員がガイドをされていましたが、その男性はツアーの何日か前に新宿で高齢者が運転してお母さんと子どもさんが亡くなった現場に行ったというお話をされて、思いが半端じゃないと思いました。

<印象的だったこと>

森山：最後に一言ずつ感想をお願いします。

西村：今回、参加させてもらって私が印象に残ったことは、当事者の方たちは忘れることはできないので、ずっと発信され続けているのですが、一方で、被災地から離れているとその時は忘れてはいけないと思っていてもどんどん記憶が薄れて問題意識も薄れて行っているということを痛感しました。

毎年、3月11日は新聞もテレビニュースを流していますが、大川小学校の場面も出てはきますが、登場する人物も文脈と切り離された映像をつないだものを見せられているだけだと思います。だから忘れてはならないことは自分としてアンテナを立てておく必要があると感じました。

協会の事業を通してつながりができていくのは、事業は人と人のつながりをつくっていくのが目的だと思うと

とても意味のあることだと実感しました。

岩城：国の自分たちの責任を逃れたい、お金は使ってますというポーズは取りたいというやり方がチェルノブイリと重なると思いました。ソ連の崩壊もチェルノブイリと関係していると思いました。福島のようにウクライナに原発を負わせていたと思うんですね。チェルノブイリは小さな村の可愛いところに廃屋があって住んでいる時の様子がそのままになっていました。ガイガーカウンターも鳴り続けていて。チェルノブイリに行くのもとても厳重で、バスから降ろされて一人一人チェックされて、4回くらい検問がありました。

ツアーはウクライナの現地の方は誰も参加していませんでした。

ソ連はウクライナに電気の供給をしなくなったので、ウクライナは泣きの涙で原発を再稼働しています。そこで働く人たちは1週間おきに交代で働いているということでした。花も咲き、



動物も住んでいる。目に見えない放射能が世界中に撒き散らされていて、目に見えないものが一番怖いと思いました。また大が小を犠牲にするのは許せないと思いました。とても東北と重なると思いました。

寺本：2年くらい前に豊中で平田オリザさんのお話を聞いたことがあります。平田オリザさんも東北のことをお話になって復興が進んでいるところは、地域の文化がしっかりと土地の人たちに根付いているところで、お祭りなどでつながっているところは復興が早いとおっしゃっていました。私は本

座談会に欠席された藤田喜美子さん（市民、ドラム読書会参加者）からのコメント：行きたいと思っていたけれど、なかなか行けず、今回ご縁があり、行くことができてよかったです。新聞やテレビで見ている、現地に足を運んで見るのとは、全然違いました。

大川小学校も遺構として残っていて、本当に良かったです。潰してしまえばなかったことになってしまいます。現地の方の思いが身に沁みました。行政や政府はその思いを受け止めてほしいです。人間の力はすごいものだと感じました。

応援したら負けますが

「必死のグッチ」に声援を！

玉置 好徳（理事）



みなさまお久しぶりです。天候不順の折ですが、お元気でお過ごしでしょうか。

さて、プロ野球交流戦が幕を閉じました。例年我らが阪神タイガースはパリーグ各球団に苦戦することが多いですが、途中までは互角の戦い繰り広げましたが、オリックスに3連敗するなど終わってみれば6勝10敗2分の負け越しで10位でした。テレビの前で必死のPATCHで応援したのに、やはりダメでした…（涙）。

そのなかで、ひときわ注目を集めて

いる選手がいます。それは原口文仁選手です。原口選手は昨年末の人間ドックで大腸がんを発見されて今年の1月31日に手術を受けました。

ところが、早くも6月4日のロッテ戦で復帰して、いきなりタイムリー2塁打を放ってお立ち台に上りました。これについて矢野燿大監督は、「すべてがドラマとか映画のような感じ」と語っていました。

また、9日の日本ハム戦では9回に代打でサヨナラヒットを打って、矢野監督が涙で言葉を詰まらせていました。原口選手はヒーローインタビューの最後に「スリー、ツー、ワン、必死のグッチー！」とファンが選んでくれた決め台詞を叫んでいました。そしてスタンドのファンも涙でこれに答えていました。これ以上ないほどの感動のひとつときでした。

このコーナーでは、以前に脳腫瘍からの復帰を目指している横田慎太郎選手を紹介しました。また岩田稔投手は1型糖尿病と闘いながらマウンドに立っています。岩田稔投手が投げて、横田選手が守って、原口選手が打つ。そんな試合をいつか見たいと思います。

阪神タイガース以外でも、広島カープの赤松真人選手は胃がんを切除して1軍復帰を目指しています。読売ジャイアンツのスコット・マシソン投手はエーリキア症という感染症からの復帰を果たしたばかりです。

昔に比べて最近では病気を公表する選手が増えたように思います。そして彼らが病気を乗り越えて活躍する姿を

見せてくれるのは、私たち観客にとっても励みとなるように思います。

とはいえ、病気との闘いはこれから先も長く続いていくことでしょう。それと並行しての選手生活は並大抵の苦勞ではないと思われます。ですから、これからも彼らに声援を送り続けていこうと思います。

有難迷惑の10連休に

「無言館」訪問記

佐佐木 寛治（事務局長）

新幹線で名古屋まで、特急「ワイドビューしなの」に乗り換え、木曽川に沿って北上、松本に到着。せっかくなので草間彌生の作品がある「松本市美術館」へ歩く。やがて原色の奇抜なオブジェが見えてくる(①)。ベンチも自販機もゴミ箱も壁も階段もあるものすべてが赤と白の水玉模様のオンパレードだ。天才と言うべきか、奇才と言うべきか、圧倒される。

翌日(4月27日)、松本から「ワイドビューしなの」で篠ノ井へ。しなの鉄道に乗り換えて上田へ。そして、上田電鉄で「塩田町」へ。最後はシャトルバス。町外れにバスが止まる。独鈷山とっこざんの麓の小高い丘(塩田平)からは、上田市の街並みが一望できる(②)。



新緑の中で桜が満開で、枝垂桜もきれいに咲いている。

坂道を辿ると、路傍に「自問坂」との石柱。ゆっくり歩いていくと前方に館が見えてくる。街の喧騒も人々のざわめきも聞こえない、閑静な場所にそれは立っていた。「戦没画学生美術館 慰霊 無言館」と刻まれた大きな岩に

迎えられて進むと、前庭にある慰霊碑「記憶のパレット」が目に入る。縦2.6メートル、横3.6メートル、重量23トンのパレットの形をした黒い御影石で、戦没画学生5百余名の名前が刻まれ、東京美術学校（現・東京芸大）の授業風景が描かれている（③）。



※2005年6月、碑面の約3分の1を覆う量の赤ペンキがかけられるという事件があったが、2008年に開館した第二展示館「傷ついた画布のドーム」の庭にあるモニュメント「絵筆の碑」に復元されている。



コンクリートが打ちっ放しの館に入る。入口も独特で、ちょっと戸惑う。いわゆる普通の美術館のイメージとは違う（④）。扉の中は異世界の雰囲気漂っている。四方の壁面には作品が並び、真ん中のガラスケースには、鉛筆や画材、スケッチ、日記や手紙、色あせた写真、召集令状、戦死の通知書などの「遺品」が整然と納められている。



息を呑んだり、見惚れるような作品があるわけではない。どちらかと言えば地味で、派手さや華美さとは無縁だ。一つひとつにタイトルがつけられ、作者の生年とその場所、出征年、没年と享年などの簡単な説明書きが添えられている。説明書きは作品だけでは読み取ることのできないものを示し、それが作者像を浮かび上がらせている。そして、戦争によって断ち切られたもの

が何であるのかも教えている。落ち着くべき場所を得た作品たちが、無言の内に語りかけているような気もする。その声をしっかり聞かねばなるまい。

次に来た道に戻り、第二展示館へ（⑤）。ここも同じく戦没画学生たちの



作品や遺品で埋め尽くしされている。圧巻は天井の「戦没画学生プラネタリウム」。380点余の画学生の美校時代の習作、下絵、デッサンが貼り込まれている。見事だ。これ自体、一つの作品と言える。「オリーブの読書館」と呼ばれる読書室もあり、窪島さんの蔵書3万冊が整然と並んでいる。

建物の入り口の庭には、絵筆が嵌めこまれた壁のようなモニュメント「絵筆の碑」がある(⑥)。右上に赤いペンキ。裏側にはこう記されている。

画家は愛するものしか描けない
相手と戦い 相手を憎んでいたら
画家は絵を描けない 一枚の絵を
守ることは「愛」と「平和」を守
るということ



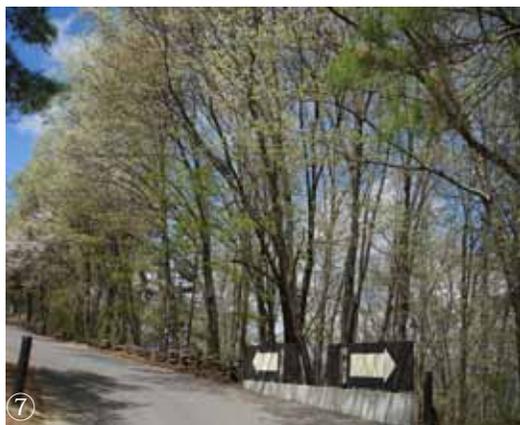
右下にはこうある。

絵筆の椅子 椅子の背を飾る九十本の絵筆は、現在画壇で活躍中の画家、美術学校で勉強している画学生さんの絵筆です。壁面を汚している赤いペンキは、二〇〇五年五月十八日、実際に「無言館」の慰霊碑にペンキがかけられた事件を「復元」しました。「無言館」が多様な意見、見方のなかにある美術館であることを忘れないためです。

そして、そばには開かないポスト。

平和への願いや夢など自分の想いを書いて投函すると永久に保存される。

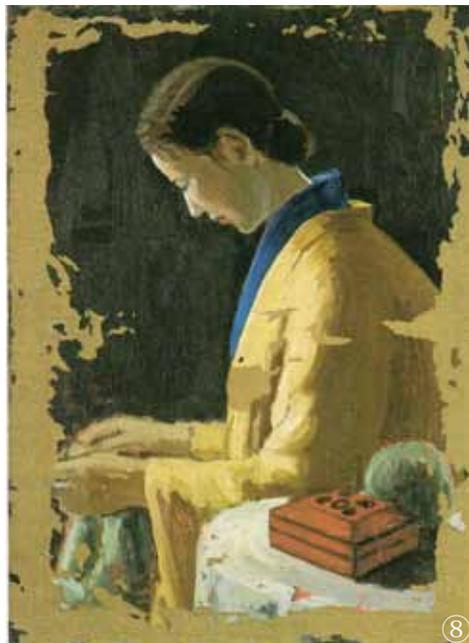
本館と第二展示館をじっくり見ようとしたら一日がかりになるだろう。今



回はそうした心づもりがなく、90分くらいの駆け足の見学になった。それでも思い返すと、いろんな印象が蘇ってくる。それほどインパクトがあるということだ。また機会をつくり、時間を気にしないでゆっくり見学したいと思う(⑦)。

最後にいいなと思った作品を一点紹介したい。興梠武さんの「編みものする婦人」(⑧)。武さんは、1917年千葉県木更津に生まれ、1935年に東京美術学校入学。1941年2月、都城連帯に入営し、満州・フィリピン・ルソン島へ転戦。1945年8月8日、ルソン島にて戦死(享年28歳)している。この絵は可愛がっていた一番下の妹さんを描いたものだが、彼女は彼が出征中に肺を患って25歳で亡くなった。それを知り、とてつもなく歎き悲しんだという。

うつむき加減の横顔から漂ってくるそこはかたない空気感。作者の熱い



まなざしが透けて見えるような気がする。

●無言館

〒386-1213 長野県上田市古安曾字山王山 3462

TEL : 0268-37-1650

開館時間 : 9時～17時

休館日 : 火曜日

2019 特別講座

映画「天皇と軍隊」を終えて

重本 洋輔 (事務局)

この映画は2009年にフランスで制作されました。海外の人々に向けて日本の天皇制について紹介する内容ですが、戦後の日本を問うていくような形

で作られており、様々な人物のインタビュー映像とともに、敗戦から今日まで矛盾や曖昧さを抱えたまま存在し続けているものとして、現在の象徴天皇

制とともに、戦争および軍の保持を禁じた憲法9条と自衛隊の存在、戦犯を祀っている靖国神社の存在などについても取り上げられています。

全体をとおして、かつての日本人にとって天皇がどのような存在だったのか、なぜ昭和天皇は東京裁判で裁かれなかったのか、なぜマッカーサーは天皇制を廃止しなかったのか、憲法9条はどのような経過をたどって誕生したのかなど、これまで漠然としか認識してこなかったり、学校で教わってこなかった象徴天皇制につながる日本の戦後史について詳しく知ることができました。

また、映画の中で昭和天皇が広島への原爆投下について「やむをえなかった…」と発言したシーンがありましたが、生前の昭和天皇についてほとんど知らない僕にとってこのシーンは大変衝撃的で「昭和天皇はこんな無責任で冷たい発言をする人だったのか」と複雑な気持ちになりました。

上映後には25名の参加者と映画の感想や意見を共有する場をもちました。ここでは映画の内容に関すること

だけでなく、安倍政権のこと、原発問題や沖縄基地問題のこと、明治憲法の復活を唱える日本会議という組織のこと、真実を伝えようとしなないマスコミのことなど、天皇制について改めて考えるとともに参加者それぞれが感じている現在の日本の問題・課題について共有することができました。

なお、講座の終盤に司会をしていた僕に対して「若い世代の人が天皇制についてどんな意見や考えを持っているのか教えてほしい」といった質問をされた方がいましたが、あの場では自分の思いを上手く伝えることができなかつたため、この場を借りてきちんと回答し、講座報告のまとめにしたいと思います。

僕が天皇という存在を初めて知ったのは1989年1月に昭和天皇が亡くなった時でした。当時はまだ小学1年生だったこともあって天皇制については全く理解できていませんでしたが、連日にわたる追悼番組や世間の自粛ムードなどを目の当たりにしたことで、子どもながらに天皇が他の人間とは違い何か特別な存在として扱われている人物だということなんとなく感じとり、「なんでこんな人が存在しているんだろうか」と不思議に思ったことはよく憶えています。

その後、部落問題や部落差別の歴史と絡めながら天皇の存在や天皇制について学んできたこともあって、僕は天皇制については、生まれや家系によって人



間に序列をつける「差別制度」で、その制度の頂点に君臨する天皇については、まさに「差別の象徴」であるということ、したがって、天皇や天皇制の存在を認めることは部落差別のような生まれによる差別の存在を認めることにもつながるという反天皇制の立場と考え方でこれまで生きてきました。

決して今の天皇や皇室の人たちを恨んだり憎んだり、常に反天皇制を意識しながら生きているわけではないものの、日の丸や君が代、それから元号なんかと一緒に天皇制についてもなくなしてほしいと願っています。

つい最近、世間の令和祝福ムードで、天皇制が多くのの人々に受け入れられたり、当たり前のように社会に根づいている現実を目の当たりにし、「なぜ世間は天皇制に対して疑問を持たないのか?」「なぜ天皇の特別扱いは許されるのか」といった違和感とともに、「もしかしたら自分の考えは間違っている



んじゃないか」と心細くなったりもしましたが、今回の講座を通じて、決して自分は間違っていないこと、同じ思いや考えを持つ仲間がいるということを確認し、勇気をもらうことができました。

一度社会に根づいてしまったものを変えていくのは決して簡単ではありませんが、今後も自分の人権意識を磨きつつ、差別以外のなにもものでもない天皇制をなくしていけるよう取り組んでいきたいと思います。

よろしくお願ひします

多様な価値観をみつめる

秋山 みき (事務局)

私は今年の4月からまちづくり協会でアルバイトをさせていただいています。今回、ここに文章を載せていただく機会をいただきましたが、大学生でまだまだ勉強中の私が伝えられることは何

かと考えてもなかなか出てこなかったので…私がここでのアルバイトを始めるに至った経緯を通して私の考えの一部をお伝え出来たらなと思います。

人権についてしっかりと考えたこと

がなければ、例えば就職差別を受けたとしても、文句を言えないまま終わるかも知れません。多様性を受け入れられる自分がいなければ、知らない間に友達を傷つけたり、悪気のない友達の一言にひどく傷ついてしまったりするかもしれません。人権について学ぶこと、人々の多様な在り方をお互いに受け入れられることは、こんな風に私たちの生活に関わってくるのかなと思います。だから私は、人権や多様性について考えたり理解したりすることは自分にとって、周りの人にとっても、社会にとっても大切なことだと思っています。

皆がお互いを受け入れあえて、自分らしく生きることが可能な理想の社会を実現するために必要なのが、人権意識を身につけること・多様性を受け入れられる価値観を持つことなのではないかな、と思うのです。

しかし、一方で、実際には、「人権は専門的で、かたい話だから自分にはよく分からない」と学ぶことを避ける声をよく耳にします。「差別用語とか



新聞記事の切り抜きやテープ起こしの作業を担っています

多様性とか、難しいから詳しく知らないけど自分はこう思うよ」と人権や多様性に関する考え方が、誰かの意見を正当化するための保険として使われるところを見かけます。

人権について考えることが大切なのはわかるけど、本当に勉強するとなると、ちょっと何となくいやだなという人が実はとても多いのが、今の社会の現状だと思っています。

このように、今、人権について考える目的と、現実の社会との乖離は大きくなっているなと感じます。だからこそ、このままではいつまでたっても理想に近づいていけないなと思います。

この理想と現実の差を埋められる人が必要なのではないかと、それが、私がここでのアルバイトを決めた大きな理由の一つです。たくさんの人権に関する知識や価値観を正しく理解し、それを色々な世代の沢山の人に分かりやすい言葉で正しく伝えていけるような人が、今、必要なのではないかと思うのです。そのために、色々な事実を知り、最新の考えに触れられるような環境に身を置き、自らの声を発信していけることが大切だと思いました。

そんな時にこのアルバイトについて知り、始めさせていただく運びになりました。

今はまだまだ勉強中ですが、いろいろなアイデンティティを持った人々が一緒に生きていける社会を目指してここで力をつけていきたいなと思います。至らない部分も多いかと思いますが、これからよろしくお願ひします。

解放ジュニアの今

結婚差別とカミングアウト

酒井 留美 (事務局)

ムラの子の「ホッとできる場所がほしい」と言ったことから始まった、子どもから大人までと年齢に幅はありますが月一回、みんなの近況報告といろいろな部落問題について話をしている、「解放ジュニア」という集まりがあります。(10年以上続いています)

そこでの今のもっぱらの話題は、彼ができ、結婚の話が出た時に自分が部落だと言うか言わないかということです。

6年前に解放ジュニアに来ている一人が、結婚の話が出たとき彼に自分は部落だと言ったことから、彼の親の部落に対する偏見、差別的な思いを彼は信じ、彼女ははずたはずたに傷つけられ結婚が出来なかったということがありました。それを身近で見ていたジュニアの子たちなので、それがトラウマとなりとても深刻な話題です。しかし、いくら話をしてもどちらがいいのか結論



ダンスレッスンの様子 (2010年)

はできませんが、みんなの話を聞いて、部落・自分自身とどう向き合うかということもが関係してくるなと思います。四六時中、部落民を意識しているわけではないけれど、ずっしりとのしかかる部落問題に恐れることだけじゃなく、自分に自信を持ち部落問題に向かうことも大切だと思います。

そして「心を開いて話せるつながりを多く築けるよう身近なところから深く感じ、広く考え人と向き合い、お互いに実感できることを求めて生き合うことが大事だ」(by 元岐阜大学教授・藤田敬一さん)をしていけたらと思います。

また、部落だという事で嫌なことに遭ったとき「部落ですが、それが何か?」と凜と言えるようになりたいし、解放ジュニアの子たちにも、そうやってほしいと思います。



研修を通して

改めて自分を問う

福島 智子（事務局）

年に数回、介護職の資格取得講座で、人権問題について話をする機会があります。

自分も以前に、介護職の研修を受けて、介護の仕事をしてきた経験があります。その経験や、その後差別問題や人権問題を学んできた中で、仕事として知っておいて欲しいと言う気持ちと、人として自分の問題として人権について出会う機会になればと思っています。

参加者は少人数で、これから仕事に関わる予定の方や、現在すでに介護の現場で働いておられる方など年齢も様々です。

毎回、はじめに差別の出会いや人権についてのイメージを、どのように思っておられるかを聞くところから始めます。

参加者には、差別や人権の問題は自分たちの生活からは遠い問題と知っている方から、子どもの時から人権教育の中でずっと聞いて来た人など、本当に様々です。その中では、一般的によく言われるように、「寝た子を起こすな」といった「言わない方がいいのでは？」という意見も良く聞きます。

なので、言わなければ人から人や、インターネットなどを通して、間違った情報が伝わって、偏見が広がってしまうので、正しく知る必要があるという事を伝えます。

その際には、これまでの経験から、出会った差別の現状について話をしますが、普段生活する中では「自分は差別しない。人権は大切だ」と言っている、いざ引越いや結婚などといったことになると、自分の中にある差別意識や知らないための不安などから差別につながることもある事なども伝えます。

最後に感想を聞くと、「しっかりと学んで、自分の子どもにもちゃんと伝えられるようにしたい」など、理解していただいた感想もありますが、あまり伝わりきれない感想があることも確かです。

2時間弱の中で、偏見を持っている人が、変われるとは思えませんが、偏見を問い直すきっかけになり、介護という仕事を通して「人権」について学んでほしいと思います。

みなさんに話をしながら、改めて自分自身も、自分を振り返る機会をもらっているように思います。

おしらせ

じんまち☆シネマ

「戦場のメリークリスマス」

8月2日（金）13時30分～ 8月3日（土）10時～

平和映画会

アニメ映画「太陽をなくした日」

8月9日（金）16時～

会場：蛍池人権まちづくりセンター

すべて
参加無料です

人権文化のまちづくり講座

「デジタル時代のメディア・リテラシー～参加と対話をとおして考える」

ファシリテーター：森本洋介さん

(FCTメディア・リテラシー研究所理事・弘前大学教育学部准教授)

8月21日（水）13時30分～15時30分

人権文化のまちづくり講座

「自分らしく生きる」（仮）

土肥いつきさん（トランスジェンダー生徒交流会世話人）、

田中一步さん（にじいろ^{アイル}i-Ru）の対談

10月4日（金）18時30分～20時30分

ブックトーク

年間予定

7月17日、9月19日、10月16日、11月20日、12月18日、1月15日、
2月19日、3月18日 水曜日10時～11時30分

平和映画会以外の会場はすべて豊中人権まちづくりセンターです
申込・お問合せは（一財）とよなか人権文化まちづくり協会まで。

役員・事務局体制（2019～2020年度）

※敬称略

●評議員

浅野 真吾（新任）
植松 英子（新任）
寺本 美鶴
田口 治代（新任）
田中 渡
島田 忠雄
西田 正一
宮前 千雅子
山口 博之

●理事

桑高 喜秋
佐佐木 寛治
大源 文造（新任）
玉置 好徳
中川 幾郎
西田 益久
西村 壽子
林 誠子
八塚 勇一

●監事

青木 康二

●任務分担

理事長 大源 文造
副理事長 玉置 好徳
事務局長 佐佐木 寛治

●事務局員

酒井 留美（総務）
重本 洋輔（協働事業）
福島 智子（相談事業）
森山 輝子（人権啓発事業）
秋山 みき

評議員の高野アヤ子さん、石原敏さん、野坂祐子さんが退任されました。この場をお借りして、お礼と感謝を申し上げます。

○編集後記○

◇故領家穰との酒の席を通じて豊中市役所の方に多く知り合った。大源さんもそのうちのお一人だったように思います。教育長だった大源さんがパン屋さんになったと聞き、あの（どの！）大源さんがパン屋さん！と驚きました。これまでの立場とは違う視点で、協会事業とりわけ豊中における部落問題の解決に向けた取り組みに助言、アドバイスをいただきたいと思います。◇とにかくお忙しい中川さん。機関誌の原稿依頼も幾度となく断られ、これは取材をするしかないと思っていたもののなかなか予定を立てきれませんでした。代表理事の任務は終えることとなりましたが、理事として今後も忌憚のないご意見をお願いしたいです。◇五中の人担時代からなので、浅野さんとの縁もかなりのものになりました。退職後も時々、事務所に来てくださってお孫さんの話や、ウロコ探しに奮闘する話で盛り上がります。浅野さんが不真面目とは言いませんが（言ってしまう？）、「程よいええ加減さ」を持つ先生が減ってきて、いい意味でも悪い意味でも、真面目な先生が増えてきたのかなと感じました。◇残念ながら私はスタディ・ツアーには参加できませんでした。栗山さんからは「森山さんもぜひいらしてね」と電話やメールでお誘いいただき、さらに先日、ご夫妻から「家族でおいでいただきたいと、子どもたちに仙台をアピールすべく」とさくらんぼが届きました。(p22) さくらんぼ自体は山形産ですが、そのお気遣いがとても嬉しかったです。

行く前は体がとても疲れていたけど、本当に元気をもらって帰ってきたと寺本さんもおっしゃっていて、これはなんと少しでも行かねばという思いに駆られました。昨年夏、一人で子ども二人を連れて飛行機に乗り北海道に行けたのだから、東北にも行ける気がしてきた。◇原稿をいただいた時点で阪神は互角の戦いでしたが、日が経つに連れ、どんどん順位が下がっていきました。やはり玉置さんが応援をされていたからでしょうか。終盤、阪神が優勝争いをする日が訪れたならば、玉置さんには静かにしていただかねばなりません。◇10連休はひたすら子どもと向き合う日々だった。「無言館」とはこれまたマイナーな所を選んだものだと思っていたら、「ショージとタカオ」（文藝春秋）のなかで、桜井昌司さんがお連れ合いと「無言館」に行ったという記述が出てきて驚いた。以前のように一人で好き勝手にかけることは難しくなったが、子どもと一緒に見れるものがないかと考えるようになり、ふと、佐喜眞美術館に行きたくなった。◇いろんな痛みを経験したが、陣痛と出産はとにかく痛くてしんどかった。「痛かった」ことは覚えてるけど、痛みそのものの感覚を体は忘れていく。心に受けた傷、差別は思い出すと真っ黒なドロドロとしたようなものが胸のなかに沸き上がってくる。怒りや悲しみがごちゃまぜになったあの感覚を体は忘れさせてくれない。子どもたちにそんな思いをさせてはいけない。◇ホームページが新しくなりました。一度覗いてみてください。ご意見ご感想お待ちしております。(森)

人権相談をご利用ください

1. 人権ケースワーク事業（豊中市からの受託事業）

●定例相談

とき：月曜・水曜・金曜日の9時～17時

ところ：螢池事務所（螢池人権まちづくりセンター内）

電話：06-6841-2315

●出張相談

とき：第2、第4木曜日の13時～15時

ところ：豊中市役所第2庁舎1階広聴係

2. 人権相談（自主事業）

とき：月曜日～土曜日、事務所開設時（9時～17時）に随時受付

ところ：豊中事務所（豊中人権まちづくりセンター内）

電話：06-6841-5300

mail：bwz37306@nifty.com

●編集：発行

一般財団法人

とよなか人権文化まちづくり協会

豊中市岡町北3-13-7 豊中人権まちづくりセンター内

TEL：06(6841)5300 FAX：06(6841)6655

HP：<http://toyoin.secret.jp/>

E MAIL：bwz37306@nifty.com 郵便振替：00960-8-153806

螢池事務所 TEL:06(6841)2315 E MAIL:bpazk307@tcct.zaq.ne.jp

ホームページが新しくなりました！